二面長者（二面）

昔々、二面（ふたおもて）にはたいそう賢い長者さまがいたんやと。二面（にめん）長者さまっちゅうて、二面の村の名前のもとになったお方や。長者さまは赤ん坊の時、頭の後ろに大やけどをしなって、そこには髪の毛が生えんし頭の皮もひきつったもんやで、遠くから見たんではどっちが顔か分からんかったらしいんやが。顔ちゅうか、面が両方にあるもんやで、誰ともなしに二面長者さまって呼ぶようになったらしいんやけど、後ろを向いてる筈（はず）やになんでもお見通しの長者さまやったらしいんやわ。

ほのころ坂井の平野は水はけが悪て作物があんまり取れんかったし、崩れ川とも呼ばれた黒龍川にみんな困っていたんや。黒龍川ちゅうのは、今の九頭竜川のことなんやって。長者さまは、鳴鹿(なるか)から三国の海まで川の曲りをとって広げれば、水がうまく流れて田んぼがいっぱいできると思て、計画を高須(たかす)山の高須長者さまに相談したんやと。高須山は黒龍川の向こう側にある山で、日和見(ひよりみ)山っても言うて、はっきり見える日は天気がよなるし、かすんで見える日は雨が降るそうや。高須長者さまは大金持ちの知恵のあるお方で、並ぶものなしと言われていたんやわ。

「それでは日野川が合流してからの川の下手をわしが掘る。二面長者殿は合流点から上手を掘られよ。二人で腕比べをしようではないか。」と、高須長者さまが言いなると、「それは面白い。どちらが早く掘りあげるか、競おうぞ。」と、

二面長者さまは受けて立ちなったんや。

高須長者さまは、腕利きの土ほり職人と大勢の人夫を集めて、さっそく下手の川岸を掘り始めたんやと。二面長者さまはと言えば、少しの人夫が鳴鹿の川岸を掘るばかりで、そこから幅広の白い布を、横を流れる竹田川のほうに向けてず〜っと敷きはじめたんやが。高須長者さまはこれを見て、

「二面長者の財力では無理だと気が付いて、神頼みの祈祷を始めたのだな。」

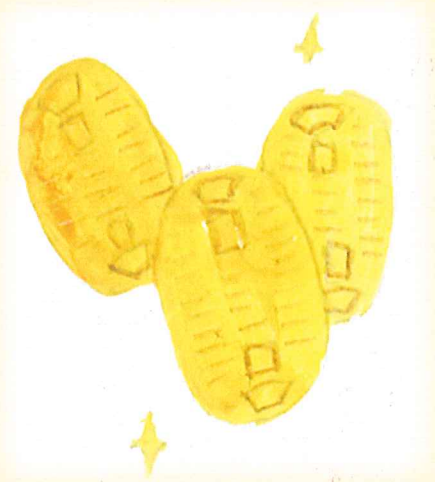
と、あなどってしもたんや。

黒龍川は流れが速いもんやで、高須長者さまの仕事はひと月たって半分も進まんかったんやけど、上手の二面長者さま

は川岸に人影ものおて、何もしてえんようやった。ところがある日のこっちゃ。あの白い布がはずされて、下から水路が出てきたんやが。二面長者さまは高須長者さまの目をごまかして油断させるために、大きな布をしき、その下を休みなしに掘り黒龍川の水が竹田川に流れるようにして、仕事をしやすくしたんや。川の水がのおなったもんやで、ぎょうさんの人夫が掘り始めると、どんどん曲がりがとれて太い川に変わっての。黒龍川の下手は日野川が合流するもんやで流れは絶えることはなく、高須長者さまが手を焼いてるうちに、二面長者さまは仕事を仕上げてまいなったんやわ。竹田川への水路を止めて、黒龍川の上手にどっと流れが戻ると、さすがの高須長者さまもすっかり参ってしもたんやと。

うるし千倍　朱千倍

黄金（こがね）のおしき　七おしき
朝日かがやく　入日まで
おつぎ　三俣の下にある



これは二面長者さまの宝が埋まってる場所の歌らしいんや。三俣の木は、二面の日吉神社の裏山にあったらしいんやけど、今ではどこか分からんのやわ。